アスリートを支える

ナガセケンコー株式会社（東京都墨田区）

ジュニアからシニアまで多くの人が楽しめる多彩なボールを製造

戦前から製造する軟式野球公認球 選手・連盟の要望に応えて改良

軟式野球・ソフトボール・ソフトテニスの各競技団体公認・検定のボールや学校体育向けの各種ボールなどを製造・販売するナガセケンコー株式会社。終戦直後に1個の軟式野球ボールを買うため、ヤミ米をかついで山形から東京へ向かう子どもたちの奮闘劇を描いた井上ひさし氏の小説『下駄の上の卵』にも、戦前の社名である「長瀬護謨（ごむ）製作所」として登場。軟式野球ボール製造の草分けとして、現在もトップシェアを誇っている。

軟式野球・ソフトボール・ソフトテニスの主力3品が売り上げの約70％を占める一方、バドミントンや卓球、セパタクロー※で使うコートマットを製造。中でもバドミントンのコートマットは世界バドミントン連盟公認として採用され、国内外での主要大会で幅広く使用されている。

幼児レクリエーション用品から各種競技用の多彩なボールまで扱うケンコーブランド。

代表取締役社長・柳田 昌作 氏

そんな同社の主力製品である軟式野球用の「ケンコーボール」。子どもが安全に野球を楽しめるようにと生まれたもので、前述の小説にも描かれているのがこのボールの初代だ。実は昭和初期には200社を超すメーカーの軟式野球ボールがあったため、全日本軟式野球連盟が規格を統一、長瀬護謨製作所のボールは公認球に選ばれた。同社は戦前・戦中の政府主導による会社合併や解散を経て、戦後に長瀬護謨工業株式会社を設立、厚生省のボール製造指定工場となっている。時代のニーズに応じて、全日本軟式野球連盟と協議の上、公認球は10～20年ごとに変更される。同社では、飛距離を伸ばしてバウンドを抑えることで、硬式野球のプレーに近づけるなど、選手や連盟の要望に応えて改良を重ね、今も公認球としての地位を守っている。

※3人が1組となり、ネットをはさんで2組がボールを打ち返し合う球技。バレーボールに似ているが、腕・手は使えず、足や頭でボールに触れる。

1930年代から時代ごとの要求に応え続けてきた7代目までの公認ボール。

日本生まれの軟式野球 アメリカでの普及を目指す

リオデジャネイロパラリンピックで日本が銀メダルを獲得した「ボッチャ」。同社は競技連盟公認品のほか、価格が手頃な「レクリエーションボッチャ」を販売し、売り上げを伸ばしている。ほかにも、中がスポンジで、表面が特殊樹脂コーティングされた学校体育向けの「ソフティボール」、運動会の定番競技・大玉ころがしの球も製造・販売。「ジャンボボール」と名付けられたそれは、量産が難しいため、注文に応じて製作している。

競技の普及・拡大を目指し、公認ボールの提供などで大会をサポートする。

また、少子化に加え、低年齢層の野球離れが指摘される中、小学校の体育の授業で実施されるようになった「ティーボール」。野球人口の裾野拡大と期待されるそれは、バッティングティーにボールを載せて打つため、投手がいない点は野球と違うが、楽しみながら遊べる運動として保護者も一緒にプレーに熱中できる。同社は関連商品も充実させてサポートしている。

一方、主力の軟式野球ボールでは1980年代から海外への販路拡大に注力。「軟式野球は年齢を問わず安全に楽しめる日本発祥の文化。世界への普及を目指したい」と代表取締役社長の柳田昌作氏。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、中南米での軟式野球大会をサポートし、軟式野球ボールの安全性や耐久性をPR。バットやグローブを買えない子どもたちのいる地域向けにはハンドベースボール用の柔らかいボールを提供し、ボール1個あれば野球が楽しめることを伝えている。同時にベースボールの本場アメリカ市場での普及も目指す。アメリカでは野球は若者のスポーツという考えが根強く、シニア世代の野球人口は少ない。そこでアメリカでプレイする日本の草野球チームをサポートするなど積極的だ。

これからも安全性を軸とした技術力と、試合球や優勝旗の協賛などの支援で、スポーツの振興・発展に貢献していく。

ナガセケンコー株式会社
- ●所在地：東京都墨田区
- ●事業内容：各種球技ボールなどの製造・販売
- ●代表取締役社長：柳田昌作
- ●従業員数：約80人

こんな会社です！
ニーズに応じた多彩なボールづくりが信条

日本発祥の軟式野球ボールのパイオニアであり、安全性や耐久性の高さを前面に出して、欧州やアジア、中南米の海外市場へも販路を拡大する同社。柳田社長が自らの行動様式を言語化した「常に考える癖をつける」が社員にも浸透。細かなニーズに対応した各種ボールの多彩なラインアップやユーザー視線のものづくりの姿勢が多くの支持を得ている。

ジュニアの軟式野球やソフトテニス、ボッチャなどの数多くの大会やイベントを陰で支えながら時代の要求に応じたボールや関連商品を生み出し続けてきた。

スポーツを通じて健康的な社会の実現を目指す企業として、東京五輪の聖火ランナーにも選出された柳田社長は、これからも社員たちと一丸となって全力で走り続ける覚悟だ。